二〇一六年度

# K国語問題

## 注意

一　試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
二　解答用紙はすべてＨＢの黒鉛筆またはＨＢの黒のシャープペンシルで記入することになっています。
　　ＨＢの黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。
　　（万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。）
三　この問題冊子は20ページまでとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。
　　なお、問題番号は一～三となっています。
四　解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に氏名のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。
五　解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
六　解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷つけたりしないように注意してください。
七　この問題冊子は持ち帰ってください。

### マーク・センス法についての注意

マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。

一　マークは、左記の記入例のようにＨＢの黒鉛筆で枠の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。
二　一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。
三　訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しくずはきれいに取り除いてください。

マーク例

| ① |
|---|
| ○ 1 ○ 2 ● 3 ○ 4 ○ 5 |

（3と解答する場合）

一　左の文章を読んで後の設問に答えよ。（解答はすべて解答用紙に書くこと）

ここでは、「自由」というテーマについて、さまざまなことを論じてみたいと思います。ただ、自由を取り上げるといっても、それは、もしかすると一般に自由について語られるものとは、少し違った角度から取り上げることになるかもしれません。

たとえば、自由は私たちにとってもっとも基本的な権利であり、誰にとっても認められなければならないものなのだとか、あるいはこの社会で幸せを実現するためには、その基本的な条件として自由が必要なのだとか、そういったことを論じたいと思っているわけではないのです。そこでは、すでに私たちの幸せの実現にとって自由が不可欠であることが前提にされています。

ここで論じたいのは、自由についてもっともっと基本的なことです。ひと言でその問題関心を要約すれば、「自由であるって、本当に幸せなんだろうか」といったことになるかもしれません。

いきなり、こんな抽象的なことをいってもピンとはこないと思いますので、もう少し具体的にここでの問題関心を説明したいと思います。

たとえば、選択の自由が制限されている一つの例として、中学校・高等学校の制服を考えてみたいと思います。今でこそ、私立の中学校・高校を中心に学生服もいろいろとバラエティに富んでいますが、私が中学生・高校生だったころはさほどバリエーションがあったわけではありません。今思い返すと、私の母校に限らず、学生服はどれもぱっとしないものでした。

ただそういったこととは別に、当時の社会では、学生服が私たちの自由を抑圧する、管理教育の象徴として語られていたように思います。実際に高校へは指定の制服しか着ていくことができなかったわけですから、そこに選択の自由がないことはきわめて明白でした。そこでは、個人の趣味に関係なく、特定の服装のみを強制されるという、息苦しさが存在したわけです。

[a]、現実の中学生・高校生はもっとしたたかでした。けっしておとなしく学校側が指定した制服を受け入れていたわけではないし、強制されてはいても、そのことで服装による自己表現が完全に抑圧されていたわけではありません。

たとえばシャツの(イ)エリやズボンのサイズ、スカートの長さといった点に関して工夫の余地はいくらでもありました。制服をそのまま身に着けるのではなく、正規の規格から少しずつ逸脱してみせることによって、仲間の間で個性を競い合っていたといえるでしょう。したがって、学生服を指定されていたからといって、私たちが服装を通じた自己表現や、あるいはほかの仲間との差異化を封じられていたというのは言いすぎかもしれません。

[b]、そういった差異は、学生服そのものを否定するものではなく、大局的にみれば、やはり中学生・高校生は均一化された服装を、いわば権力によって強制されていたのです。

私たちの社会は自由社会ということになっていますが、中学生・高校生が大半の時間をすごしている学校では、(おそらく教育の必要という観点から)少なからず自由が制限されています。したがって、人によって感じる程度に差はあるでしょうが、学校はどこか息苦しい場所なのかもしれません。そして、その息苦しさを代表するものが、制服なのではないかと思います。

しかし(2)奇妙なことに、かつて中学生・高校生だった人にとって、学生服は忌み嫌われるようなものだったのかというと、必ずしもそうではないように思います。

私が中学生だったとき、担任の教師が学生服をどう思うか、とクラス全員に質問したことがありました。そのとき、ほとんどが、制服があることについて肯定的な意見をもっていました。また、近くの高校では私服での登校が認められていたにもかかわらず、生徒のほとんどが学校から指定された制服を着て登校していたのです。

もちろん、これらは限られた事例にしかすぎないので一般化はできませんが、着て行く服に悩まなくてもいいからとか、冠婚葬祭のときに便利だからとか、理由はさまざまですが、学生服を肯定的に捉える感覚は確かにあったように思います。

こうして考えてみると、「自由である」ことの意味はそう単純なものではなさそうです。確かに、特定の選択肢を強制されるのではなく、さまざまな選択肢の中から自分の判断で選択できることの方が、自分にとって、より満足のいく結果を実現してくれるように思います。そういった意味では、誰にとっても、より自由である状態の方が望ましく思われます。

たとえば登校時の服装についていうと、学校から指定された制服ではなく、自分の判断で決めた服を着ていく方がお洒落を楽しむことができるし、服装に、より関心をもつことができそうです。そして大切なのは、服装を通じて、ほかの誰かとは違う自分を表現することも可能になるという点です。もちろん、こうしたことは学校を離れた社会ではごく当たり前に行なわれており、本来取り立てて問題にされることでもないように思われます。

いずれにしても、自分をその他大勢の中に埋没させてしまうのではなく、自分が自分であるためには、「自由である」ことは欠くことのできない前提だと思われています。だからこそ、私たちは自由を、私たちの社会においてもっとも基本的な価値の一つとして尊重してきたともいえるでしょう。

しかし、「自由である」ことがこのようなものだとすれば、私たちは(3)「自由である」ことによって、いやおうなく自分というものを他者に評価されてしまうといえるかもしれません。たとえば、制服を着ているときであれば、服装によってその人の個性を判断しようなどという人はいないでしょう。ところが、私服であれば、そうする人が出てきても不思議ではありません。

服装なんかで判断されたくないと思っていたとしても、そして服装にはできるだけ(a)無頓着でいたいと思っていても、それが私服である限り（自分の判断で選んだ服装である限り）、他人が服装でその人となりを判断しようとするのを妨げることはできません。いわば、私たちは「自由である」ことによって、いやおうなく他者の視線に(b)晒されることになるのです。

このことを前提にして、自分が完全に「自由である」状態になったとき、いったい何が起きるのかを想像してみましょう。

私にはこれだけは(ロ)ユズれない、というものがあって、それについては、どうしても自分の主張を押し通したい、という場合があるかもしれません。しかし、すべてがすべて、そうであるわけではありません。中には、さして重要でないものも混じっていることでしょう。

そうすると、完全に「自由である」ならば、自分では、本当はどうでもいいと考えているようなことについても、自分で判断し、行動することが必要になりそうです。けれども、実際にそんなことができるのでしょうか。

もちろん、すべての他者が私の一挙手一投足に注目し、私という人間を品定めしているわけではないでしょう。しかし、誰がどこで私のことを、しかも私の思いがけない部分について評価しているか、わかりません。

そんなとき、私はそのような部分についても、適切に自分を表現することなどできるのでしょうか。あるいは仮にできるとしても、本当はどうでもいいと思っているようなことにまでいちいち自分で判断しなければいけないとき、私たちはそこに息苦しさを感じることはないのでしょうか。

このように考えてみると、「自由である」ことは、私たちにとってつねに解放を意味するものではない可能性があります。ときには、「自由である」ことによって、(1)自由でなかったときとは異質の息苦しさを感じることがありえるのです。

（数土直紀『自由という服従』による）

問

(A) ═══線部(イ)・(ロ)を漢字に改めよ。（ただし、楷書(かいしょ)で記すこと）

(B) ▬▬線部(a)・(b)の読みを、平仮名・現代仮名遣いで記せ。

(C) ═══線部(1)について。これは具体的に何を指すか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

1　学生服の指定が服装の選択の自由を制限していたこと
2　かつて、学生服の種類が少なく見栄えも悪かったこと
3　抽象的な議論をとりあげる際、まずは具体例をあげること
4　現代において、学生服がむしろ自由の象徴となっていること
5　社会で幸せを実現するためには自由が必要であること

(D) 空欄 a ・ b にはそれぞれどのような言葉を補ったらよいか。最も適当な組み合わせを左記各項の中から一つ選び、番号で答えよ。

1　a　もちろん　b　しかし
2　a　もっとも　b　したがって
3　a　実をいうと　b　他方
4　a　こうして　b　けれども
5　a　それゆえ　b　だからといって

(E) ――線部(2)について。筆者がこのようにいうのはなぜか。その理由として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1　生徒が学生服を着用して大半の時間をすごす学校が、本来、息苦しい場所であるから。
2　実際のところ、生徒は学生服に工夫を凝らすことで、ある程度、自己表現をしてきたから。
3　生徒にとって、学生服は、学校において自由を制限するものの一例にすぎないから。
4　当時の生徒の多くは反権力の考え方をもっており、学生服には強く反発するはずだから。
5　学生服は服装の自由を制限することで、生徒に息苦しさを感じさせるはずのものだから。

(F) ――線部(3)について。これは具体的にはどのようなことか。その説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1　自由を行使することで、往々にして他者と異なる人間性が明らかになり、目立ってしまう。
2　さまざまな服装の生徒が存在することにより、服装がその思想の表現と感じられてしまう。

3　選択の余地が生じることで、選択の結果がその者の人格のあらわれととらえられてしまう。
4　自由を行使すること自体が他者から奇異の目で見られ、否定的な評価を受けてしまう。
5　たとえ好んで学生服を着ていても、嫌々ながら着ているものと勘違いされてしまう。

(G)　――――線部(4)について。これは具体的にはどのような「息苦しさ」か。その説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1　あまりにも選択の幅が広がりすぎて、選択の自由を行使するのに大きな苦労が必要となる「息苦しさ」
2　自由が常に解放を意味するとは限らず、むしろ、他者の自由によって圧力を受ける「息苦しさ」
3　自分がどうでもいいと思っていることについては、うまく自己表現ができないことによる「息苦しさ」
4　自身が本来重きを置いていない事柄についてまで、主体的に判断しなければならない「息苦しさ」
5　他者から注目され品定めされることのないよう、常に周囲を注意しなければならない「息苦しさ」

(H)　左記各項のうち、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ　さまざまな事情を総合的に考慮すれば、学生服の指定はあったほうがよい。
ロ　学生服の指定により、服装による自己表現が完全に封殺されるわけではない。
ハ　かつて、学校の息苦しさの象徴であった学生服は、生徒から嫌忌されていた。
ニ　人によっては、さまざまな自由が奪われた状態のほうが望ましいこともある。
ホ　学生服の指定がなければ、生徒は服装による自己表現を強いられかねない。

二　左の文章は、武満徹（作曲家、一九三〇～一九九六）が一九六〇年に発表したものである。この文章を読んで後の設問に答えよ。（解答はすべて解答用紙に書くこと）

ぼくは、一九四八年のある日、混雑した地下鉄の狭い車内で、調律された楽音のなかに騒音をもちこむことを着想した。もう少し正確に書くと、作曲するということは、われわれをとりまく世界を貫いている《音の河》に、いかに意味づけるか、ということだと気づいた。

酸えた体臭と、疲れている人たちにまじって、ぼくも疲れていた。ぽっかりと口をあけた出口から明るい外に出て、人々はめいめいの方向に散っていたけれど、足どりはやっぱり疲れている。外界と遮断された暗い地下でも、明るい太陽の下でも、特別何も変ることはない。現代では、それは当然のことなのだろうか？

ぼくが、その頃考えていた音楽は、たしかに人々と何もかかわりはなかった。人々はたがいに孤立しあっていた。

だが、ぼくは作曲家として、人々と何のかかわりもない場所で仕事を進めていることに耐えられなくなったし、ぼくは、自分なりに結びつきの確かさが欲しかった。

現代音楽は、大衆の生活とは無縁のところにある。

では、(1)なぜ今日音楽は孤立してしまったのだろうか？

音楽は、本来数理的な秩序の上に立つものだ。作曲家が、数の錬金術をきたえあげることで、普遍的な完き美をめざすことに誤りはない。が、音楽にかぎらず、ぼくたちの仕事は、精神において触れえた事物を提示することにある。芸術は創造精神の具体化に他ならない。音楽作品は、《音》を媒体として、精神によって捉えられた事実なのであり、その意味で、作品はまったく具体的なのである。よく、音楽は抽象的であるといわれるが、この言葉は、大変あいまいだし、誤りやすい。ただ《音》の、いわゆる抽象性ということについては、ぼくも否めないが、作品はあくまで具体的に、生々しい音楽感動を伝えるものでなければならないだろう。

前述したように、音楽は、数理的な秩序の上に成り立ち、他の仕事と異なって、特殊な《時間性》の問題が介在するから、芸術作品としての形式の問題が重要となってくる。そして、それらの方法は、あくまで人間の実在を探究するはずのものであり、作曲家が外形の図式的な追究にのみ終始するとしたら誤りもはなはだしい。

いま、ぼくがここに論じ、ぼくたちが手にする音楽は、ヨーロッパの音楽であり、調律された組織のなかにある《音》である。ヨーロッパで、音楽が芸術として位置した日から、長い時が経った。その間に作曲家は、音楽の本質を、派生的な、図式的な方法の追究とすりかえてしまった。音楽にかぎらず、西欧の合理主義思想は、細分化の傾向をたどり、作曲家は数の錬金術をきたえあげることによって、音楽の本質を見失っていった。

今日、いわれている十二音音楽(注1)も、歴史の必然的な結果ではあろうが、前述した意味で、大変危険な面をもっている。十二音音楽において顕著な、音楽の数学的、幾何学的な追究は、全く知的な行為であって、それは、美学の純粋性が際立ちすぎることによって得る欠陥と同様の結果をまねくであろう。そこには芸術創造の第一の要素である［　　］おそれがある。

しかし、ぼくたちは、いつでも新しい秩序を発見することに勇敢でなければならないし、新しい方法に対して怯懦であってはならないのだ。そして、忘れてならないのは、そこに、いつでも人間の手を通すことなのだ。

地下鉄の黄色の薄暗い光線の下では体に伝わる振動だけが確かだった。

ぼくは音楽について考えていた。いや、音楽のあいまいな意味と機能を断ち切った《音》そのものについて考えていた。

《音》は、調律された組織のなかにあって、数理的な、物理的な束縛をヨギなくされている。作曲家は、物理的な機能と、意味を通してしか音を把握しようとしなかったし、それにあまりにも深くなじんでしまった。

しかし、音楽家の仕事は、音の物理的機能などということについてよりも、もっと本質的な《音》そのものについての認識と体験からはじめられるべきだろう。

ぼくは、太陽にむかうとくしゃみする。これは、音楽ということとはかけはなれた、突飛な行為だろうか？　そして、人が立ち去る扉の音に、苦しさを感じたことは誤りだったのか。

ぼくも、人々も、体に伝わる正確な振動にもたれることで、いくらかの安息を得ている。汗ばんだ皮膚の下の鼓動のように、静かにそれを受け止めている。

音楽が、人間の発音する行為と、素朴な挙動のなかから生れたことは事実なのだ。しかし、ぼくたちは、いつか長い歴史の中で、便宜的な機能の枠の中でだけ《音》を捉えようとしていた。ぼくの周囲にある豊かな音は、それらは、ぼくの音楽の内部に生きなければならない。ぼくは勇敢にそれをすべきだろうと思う。

異なったものに、また時として矛盾するものにさえ、調和を与えるということは、われわれに「生きる」すばらしい道を歩かせる訓練なのだ。

《音》は、一つの持続であり、瞬間の提出である。その意味で、便宜的な小節構造の上に成り立つ形式は(a)虚しい。

われわれは暗い地下道を走っている。その時ぼくの連想は、胎内をつっきって、人間の太古を探っていた。穴居生活と、地下鉄に乗っている現代の人間生活との相違は何だろうか。

この地下道は、コンクリートと固い(b)楔に打ちこまれたレールを内部にもっている。ただそれだけのことで、昔の(c)ドウクツとたいした差異はないだろう。

昔、男たちは武器をもって戦わねばならなかった。戦うものこそが男だった。

突然おそいかかる宇宙、そして生命を脅やかすもののすべてを倒さねばならなかった。戦争とうた。素朴な愛のいとなみとうた。恐怖（おそれ）と祈り。歓喜と祈り。

その頃の人々と外界との照応（コレスポンダンス）はすばらしいものだった。人々は樹々と交わり、石と交わり、空と交わっていた。そして、そこでは詩と宗教と歌と踊りが、分化されない総体として在った。戦うこととそれらは、一致していた。

それらは、たしかに芸術以前のものだろうが、それだからこそ、ぼくは、その優美な力に捉えられてしまう。

だが、現代の人間は、もはや魔術的な呪文を口にすることができなくなってしまっている。ぼくたちからは、魔力は去ってしまったのか。行動するのではなく、表現すること。ぼくは芸術の嘘[2]に耐えなければならないだろうか？

ぼくは、黄色の薄暗い光線の車内で、もう少し、人々とのむすびつきの確かさが欲しかった。

調律された楽音のなかに、騒音をもちこむこと。この方法は、その時のぼくに何かを暗示した。

テープ[注2]の上に、さまざまの音響を録音してみる。そして、それらの音にぼくはとりかこまれ、それから触発された感動を、偶然的にテープの上に定着させる。ぼくは、ぼくの精いっぱいの仕方で外界との通信をおわる。ぼくは、音と一致することができるだろう。音の一つ一つは、ぼくの心の動きの用語となり、説明をこえた容貌のひとつを写し出すものだ。

ぼくは、この方法を表現というよりは、むしろ行動という言葉に近い感覚で捉えた。だから、ぼくは、消すことのできるテープを択んだのだ。ぼくは、これで自分を訓練してみる。そうした時、ぼくは、必ず音楽に新しい音の大地を発見できるだろう。枯渇している音楽に、偶然の要素、非合理なものを導入しよう。

（武満徹「ぼくの方法」による）

（注）1　十二音音楽――二十世紀前半にオーストリアを中心に編み出された、西洋音楽の音階を構成する十二音を同一の頻度で均等に使用する作曲法。

2　テープ――音声を記録するための磁気テープのこと。

問

(A) ═══線部(イ)・(ロ)を漢字に改めよ。(ただし、楷書で記すこと)

(B) ▬▬線部(a)・(b)の読みを、平仮名、現代仮名遣いで記せ。

(C) ────線部(1)について。その理由として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 ヨーロッパ由来の調律された音に基づく作曲法が、大衆とは無縁なものとなっていってしまったから。

2 数理的に完全な美の理想を追究した結果、音楽が人々を感動させる力や躍動感を喪失してしまったから。

3 利便性をもたらす現代の物質文明によって疲弊した人々が、本来の人間らしい感情を忘却してしまったから。

4 音楽の定義や作曲法が細分化・専門化したことで、音楽家の表現の自由や自発性が制限されてしまったから。

5 音楽家が形式への合理主義的な関心を強めたことで、音楽と心身や外界との絆が弱くなってしまったから。

(D) 空欄 ▭ にどのような表現を補ったらよいか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

1 純粋性を損ない、形式主義に陥る　　2 主体性を独走させ、混沌を招く

3 創造性を封じ込み、停滞させる　　4 感受性を硬くし、固定させる

5 革新性に執着し、隘路に突き当たる

(E) 文中では、音という語が「《音》」と「音」というように、括弧《 》の有無で区別して用いられている。左記各項のうち、括弧をつけて「《音》」と表記されているものの具体例として合致するものは1、合致しないものは2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 線路の振動　　ロ うた　　ハ くしゃみ　　ニ 十二音　　ホ 扉の音

(F) ────線部(2)について。筆者が「嘘」という語で述べようとしているのはどのようなことか。その具体例と

して最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1　音楽の秩序を重視し、数理的な美を崇拝すること

2　合理主義的な明晰さを作曲の本質として当然視すること

3　作曲において抽象的な完成度を表現の目標とすること

4　音楽の感覚的な美に加えて魔術性を重視すること

5　調律音を否定して環境音にも意味を見出すこと

(G)　筆者の考える新しい音楽とはどのようなものか。左記各項のうち、合致するものは1、合致しないものは2として、それぞれ番号で答えよ。

イ　音楽がたどってきた歴史を踏まえ、個性と形式が融合する具体的な表現を目指す音楽

ロ　音楽の定義と枠組みを捉え直し、音楽家と人々と外界との新たな関係を構築する音楽

ハ　数理的な美の理想と秩序から切り離された表現によって、人々とのかかわりを回復した音楽

ニ　周囲の身近な音を偶発的に導入することで、心身の実感を伴った性質を獲得した音楽

ホ　音楽の数理性や形式美に寄り添いながら、外界との原初的な照応を可能とする音楽

三　左の文章は、『松浦宮物語』の一節で、遣唐使として唐に渡った主人公（氏忠）が、現地で出会った老翁から琴を与えられ、琴を習うのなら、自分ではなく商山の華陽公主という高貴な女性から習うように勧められ、その言葉どおりに公主を訪ねた場面である。これを読んで後の設問に答えよ。（解答はすべて解答用紙に書くこと）

暮れもはてぬに急ぎ出でて、聞きしかたに尋ね行く。(1)いみじき馬をいとどうち早めつつ、夜中にもなりぬらむと見ゆるほどに、同じ(注1)ごと高き楼の上に、琴の声聞こゆ。はるかに尋ね登れば、道いと遠し。これは鏡のごと光を並べ、いらか(注2)を連ねて造れるものから、屋数少なく、かりそめなる屋に人住むべしと見ゆれど、わざと木陰に隠れつつ、楼を尋ね登れば、言ひしに変らず、えも言はずめでたき玉の女、ただひとり琴を弾きゐたり。

(2)乱るる心あるなとはさばかり言ひしかど、(3)うち見るより物おぼえず、そこら見つる舞姫の花の顔も、ただ土のごとくになりぬ。古里にていみじと思ひし神奈備(注3)の皇女も、見あはするに、(4)鄙び乱れたまへりけり。あまりことごとしくも見ゆべきかんざし、髪上げたまへる顔つき、(5)さらにけ遠からず。(6)あてになつかしう、きよくらうたげなること、ただ秋の月のくまなき空に澄みのぼりたる心地ぞするに、いみじき心まどひをおさへて、念じ返しつつ、かの琴を聞けば、よろづの物の音ひとつに合ひて、空に響き通へること、(7)げにありしに多くまさりたり。

(8)とかくのたまふこともなけれど、ただ夢路にまどふ心地ながら、この得し琴を取りて掻き立つるを見て、もとの調べを弾きかへて、はじめより人の習ふべき手をとどこほるところなく、ひとわたり弾きたまふを聞くままに、やがてたどらずこの音につけて掻き合はすれば、我が心も［　　］まさるからに、(9)すずろに深きところ添ひて、やがて同じ声に音の出づれば、手に任せてもろともに弾くに、たどるところなく弾き取りつ。

これも夜の明け行けば、琴をおしやりて、帰らんとしたまふ時に、悲しきことものに似ず、(10)おぼえぬ涙こぼれ落ちて、言ひ知らぬ心地するに、公主もいたう物をおぼし乱れたるさまにて、月の顔をつくづくとながめたまへるかたはらめ、(11)似るものなく見ゆ。例の文作り交して別れなむとする時、「この残りの手は、九月十三夜より五夜になん尽くすべき」とのたまふ。

（注）1　同じごと――前夜、氏忠は高楼の上で老翁と出会った。それと同じように、の意。
2　いらか――瓦葺きの屋根。
3　神奈備の皇女――氏忠が幼い頃から心を寄せていた日本の姫宮。

問

(A)　――線部(1)の解釈として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。
1　美しい馬　2　穏やかな馬　3　すばらしい馬　4　老いた馬　5　忌まわしい馬

(B)　――線部(2)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。
1　その人に決して心を奪われてはならないと自分をあれほど強く戒めていたのだが
2　決して乱心などしないと老翁に対してあれほどはっきり誓ったのだが
3　取り乱した振る舞いをしてはならないと自らあれほど強く決意したのだが
4　平静を失った心であってはいけないと老翁があれほどきびしく言ったのだが
5　あなたはきっと平常心を失わないでしょうと老翁からあれほど言われてきたのだが

(C)　――線部(3)の現代語訳を十字以内で記せ。ただし、句読点は含まない。

(D)　――線部(4)の文法的な説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。
1　動詞「乱る」＋尊敬の補助動詞「給へる」＋詠嘆の助動詞「けり」
2　動詞「乱る」＋尊敬の補助動詞「給ふ」＋尊敬の助動詞「る」＋詠嘆の助動詞「けり」
3　動詞「乱る」＋尊敬の補助動詞「給ふ」＋完了の助動詞「り」＋詠嘆の助動詞「けり」
4　動詞「乱れ給ふ」＋完了の助動詞「り」＋詠嘆の助動詞「けり」
5　動詞「乱れ給ふ」＋尊敬の助動詞「る」＋詠嘆の助動詞「けり」

(E) ――線部(5)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 ますます　2 大して　3 実に　4 決して　5 ずいぶん

(F) ――線部(6)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 どこか懐かしく　2 じつにあどけなく　3 予想外に親しみやすく

4 高貴で近寄りがたく　5 上品で心ひかれ

(G) ――線部(7)の解釈として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 なるほど以前老翁が弾いた琴に比べてはるかに優れている

2 本当にこれまでに聞いた多くの琴の音よりもきれいである

3 自分が弾く琴とはまったく違ってたいへん優れた技巧である

4 確かに事前に聞いていた評判以上にこの琴の音はきれいである

5 これまで一切体験したことがないほど心地よいひとときである

(H) ――線部(8)は誰の様子か。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

1 唐の帝　2 公主　3 氏忠　4 老翁　5 神奈備の皇女

(I) 空欄［　　］に入る言葉として最も適当なものを本文中から二字で抜き出して記せ。ただし、句読点は含まない。

(J) ――線部(9)について。これはどのような状況を表現しているか。その説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 氏忠が軽率にも公主が弾いた深みのある難曲に挑んでいる状況

2 氏忠が果敢にも公主の琴曲の伴奏をしようと心の奥で決意している状況

3 あとから加わった公主の伴奏が氏忠の演奏に奇しくも味わい深さを加えている状況

4 氏忠が公主からついに高楼の奥深いところへと招き入れられている状況

5 氏忠が弾く琴の演奏に思いがけず深い興趣が備わってきた状況

(K) ――線部(10)について。この「涙」の説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 生涯忘れられない涙　2 思わずあふれた涙　3 初めて流した涙

4 悲喜こもごもの涙　5 おさえきれなかった涙

(L) ――線部(11)の解釈として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 公主と氏忠は類なく理想的な間柄であると見える

2 隣にいる氏忠こそが最も公主を慕っていると見える

3 辺りの情景はこれまでにないほど趣深く見える

4 公主の横顔は比類のない美しさであると見える

5 夜明けの月がたとえるものがないほどに輝いて見える

【以下余白】